特集

日本家族社会学会 20 周年記念テーマセッション 2010

日本の家族社会学は今——過去 20 年の回顧

家族社会学における家族史・社会史研究

米村千代

要 約

過去 20 年間の日本の家族社会学界における家族史研究、社会史研究の動向をレビューする。その内的展開を追うと同時に、社会学外の家族史研究・社会史研究との対比を通して家族社会学における特徴と課題を指摘する。本稿では、特に歴史的方法と認識論という二つの点に焦点をあてて成果を評価している。方法面においては精緻化、専門化が進んだ 20 年であり、認識論という点では、既存研究のアンチテーゼとして登場した近代家族論が家族社会学におけるドミナントな枠組みとして定着し、内在的・外在的批判や議論を通して展開した時期といえる。最後に、これからの家族史研究にとっては、専門性や方法の厳密さを尊重しつつも、他の方法やアプローチとの間で開かれた議論が必要であるという課題を指摘してまとめに代える。

キーワード: 歴史的方法と視点、家族史、近代家族

2011, 家族社会学研究, 23(2): 170-181

Historical Methods and Perspectives on Family Sociology over the Last Twenty Years

Chiyo Yonemura

Abstract

The aim of this paper is to review historical methods and perspectives on Japanese family sociology over the last twenty years. I focus mainly on the two following contributions: 1) methodological progress and specialization; 2) the advance of modern family theory. These contributions contain longitudinal, comparative perspectives and interdisciplinary discussions. Through historical studies, we can recapture the contemporary Japanese family reflectively and have some prospect of the postmodern family. In the conclusion, I indicate further issues of historical studies on family sociology. Further discussions between different methods and perspectives should bring greater outcomes for the advance of family sociology.

Key words: historical methods and perspectives, family sociology, modern family

2011, Japanese Journal of Family Sociology, 23(2): 170-181

よねむら ちよ: 千葉大学

Chiba University, 1-33 Yayoicho, Inage-ku, Chiba 263-8522, Japan

E-mail: yonemura@L.chiba-u.ac.jp

I. 課題と目的

本稿では、過去20年間の家族社会学における家族史研究、社会史研究の動向をレビューする。その内的展開を追うと同時に、社会学外の家族史研究・社会史研究との対比を通して、家族社会学における特徴と課題をまとめることを目的とする。その際に、歴史的方法と、家族の意味や自明性を問い直す認識論的視点という二つの軸から動向をとらえる。

II. 家族史研究の論点：歴史的方法と視点

1. 対象と分類

対象となる20年間に『家族社会学研究』に掲載された論文、研究動向、書評および文献紹介の対象書をレビューの対象とする。加えて、当該期間に家族社会学に関連の深い領域で言及すべき文献についても取り上げる。補足的に他の学会誌にも言及するが、あくまで、家族社会学における家族史・社会史研究をレビューすることを主眼とする。実は、掲載論文および研究動向のなかにストレートに家族史・社会史研究と呼ぶものは多くはない⁽¹⁾。書評、文献紹介まで対象を広げると、歴史人口学や歴史学、民俗学など社会学に限定されない領域まで広くカバーされており、比較家族史学会の動向など隣接領域への目配りもきいていると評価できる⁽²⁾。

厳密な意味で歴史的研究ではなくとも、家族史研究を端緒として展開された近代家族論は、今日の家族社会学におけるドミナントな枠組となっている。しかし近代家族論にかかわるすべての論文を対象とすることは、本稿の範囲を超えてしまうため、近代家族論の動向については、あくまで家族史研究の領域から概観することとする。

家族史・社会史研究とは、広義には家族や社会にかかわる歴史的研究全般を意味するが、狭義には「新しい社会史」の流れをくんだ家族史、社会史研究を指す。本稿の主旨からいうと、おもに後

者（狭義の意味での家族史・社会史）の特徴を踏まえることが重要となるだろう。

そこで本題に入る前に、歴史学における社会史・家族史の意義と特徴を見ておきたい。二宮宏之は、アナール誌の理念としての「生きた歴史」（社会史研究）の基本的な視点として、「すべての事象を常に全体的な連関のうちにとらえること」、「過去を常に現在との対話のうちにとらえること」の2点を挙げる（二宮1986: 30-1）。さらに、こうした新しい社会史においては「歴史における日常性、集合心性、社会的結合」の3点が重要であるとし（二宮1986: 52）、これらの視点には人類学、民俗学、社会学などの隣接研究からの示唆が大きかったとする。「集合心性」については、デュルケームの集合意識概念の影響が指摘されている。社会史・家族史研究は、この意味ではそもそも「社会学的」であり、社会学における家族史研究のインパクトは、部分的には社会学的知見の逆輸入であるということもできよう。

次に、視線を日本に移して、日本における家族史研究において社会学研究がどう位置づけられているのか、佐々木潤之介らを編者として編集されている吉川弘文館の日本家族史論集から見てみよう。ここから直接に「歴史学が社会学に求めるもの」を読み取ることは早計かもしれないが、家族史研究における社会学研究の立ち位置を推し量ることは可能であろう。収録されている社会学関連の論文は、規範や意識にかかわる研究、概念整理や学説にかかわる研究、現代社会家族を対象に含む研究という傾向がある⁽³⁾。歴史的研究において社会学的研究がいかなる貢献をなしているかは、本稿においては重要なテーマの一つである。

いずれにせよ社会史研究は、日常や生活に着目するという方法の新しさと認識論的な新しさを併せもち、それまでの事件史、政治史中心の歴史的方法や歴史観に対する異議申し立てであった。本稿でも、以下、家族史研究の方法（＝歴史的方法）と視点（＝認識論）の双方からレビューを進めていく。

2. 歴史的方法

歴史的方法の分類については、M. アンダーソンの 3 分類——(1) 人口動態研究、(2) 感情研究、(3) 世帯経済研究——(Anderson 1980=1988) を参考にする⁽⁴⁾。日本の家族社会学会全体に広くインパクトをもったのは、アリエスに代表される感情研究(心性史)であり、研究グループとして精力的に日本研究を進めたのは歴史人口学的研究であった。宗門人別改帳を用いた分析やデータベースの構築(速水編 2002a, 2002b ほか; 平井 2008; 岡田 2006) が代表的である。感情研究の領域では、心性史や歴史社会学的研究がある。たとえば、雑誌、教科書、新聞記事等の言説や図像を分析した研究を挙げることができる(赤川 1999; 小山 1991, 1999; 牟田 1996; 西川 2000; 野田 2006, 2008)。また家族史からの直接の系譜ではないが、フーコー的な言説分析を精緻化した歴史社会学的研究の成果もある。世帯経済研究に関しては、世代やテーマに照準した個別研究がみられる。方法としては多様な資料を用いて、複数のアプローチが併用されており、他領域との重なりも多い。家族史研究、歴史社会学研究では、必ずしも一つの方法のみに依拠するのではなく、テーマ指向(theme-oriented)で複数の資料や方法を併用した研究も少なくない。世帯経済研究として独立に存在するというよりもライフコース研究・戦略論・階層論、地域・企業研究など、複合的な研究アプローチを含んでいる研究を挙げることができる(嘉本 2001; 森岡 2002, 2005; 永野 2005; 田間 2006; 米村 1999)。

3. 方法の精緻化と多様化・個別化

歴史的方法における 20 年の特徴をまとめるとするならば、方法の精緻化、テーマの多様化が進んだ 20 年であったといえる。そのことがはらむ問題もある。

牟田和恵は 10 周年のセッション⁽⁵⁾において、家族社会学の専門化、体系化に伴う自閉化の問題に触れている(牟田 1998)。牟田によれば「自閉化」への危惧は、70 年代に森岡清美、上子武次ら

によってすでに表明されている。そこで指摘されていたのは、歴史的関心・構造的関心を失って、閉鎖的集団としてのみ家族をとらえてしまうことの問題であった。牟田は、家族史研究の登場によって、失われつつあった歴史的・構造的関心がふたたび新しい潮流として立ち現れてきたとする。

家族史研究は、家族社会学の自閉化を打破することに貢献できたのであろうか。同セッションのコメンテーターとして登壇した落合恵美子は、国際比較研究の進展により、この問題の解消に向けて、「次の 10 年」(1998 年時点から: 筆者注)で飛躍的な成果を上げるのではないかと期待を寄せつつも、同時に、人口学と家族社会学との対話の難しさも指摘している(落合 1998)。理由について、人口学における方法の精緻化が参入を困難にしているという森岡清美のコメントを紹介している。また落合には、別稿(落合 2005)において、歴史社会学における実証主義と構築主義の対話の困難さについての言及もある(数量的解釈と意味的解釈の摩擦)。確かに落合らが進めてきた直系家族の比較研究(Fauve-Chamoux and Ochiai eds. 2009)や、アジアを拠点とした親密圏/公共圏に関する国際比較研究(親密圏と公共圏の再編成をめざすグローバル COE)の成果が蓄積される一方で、異なったディシプリン、方法を架橋する困難さが依然併存しているのが現状であろう。

歴史学における家族史・社会史研究は、当初よりミクロな多様性や個別性をとらえつつも、「全体を見る」という学際性や国際比較を視野に含んではいた。しかし、研究者がそれぞれの方法や個別のテーマに内閉し、現代社会への示唆や全体社会との関連性が見えにくくなるという懸念が表明されている。以下は、歴史人口学についての齊藤修の言及であるが、社会学者も真摯に受け止めるべき言葉といえよう。

「今日、人口研究のこの分野(筆者注: 家族復元研究)において、「厳密に人口学的な」

推論は非常に強く人を引きつけ、その技術的な魅力は極めて大きい。だからこそ、発展への望みを拡大するためには、異なる学問分野の最前線からの挑戦をうける勇気が、これまで以上に緊急に求められるのである」(斉藤 2003)。

歴史研究の領域に限ったことではないが、いわゆる他流試合を可能にするには、自身の方法に厳密であること(＝専門性の確立)と他者との対話に対して開かれていること(＝問題意識の明示、論理性・明晰性)両方が求められる。方法やデータ解釈に厳密であり、その自負があるによって、かえって対話を困難にするというのは皮肉である。

家族社会学における家族史研究についても、確かに牟田や落合が期待を寄せたような社会構造や歴史への関心、国際性・学際性を射程に含んでいた。しかしこの20年間で進展した方法の精緻化や領域としての自律化は、やはり自閉化の契機をはらむものであったし、後述するように日本の「伝統的」家族研究および現代家族研究との対話が進まなければ、専門領域に内閉してしまう危惧はぬぐえない。

4. 資料批判の重要性

「新しい社会史」研究は、資料万能主義や実証主義への批判を出発点にもつとはいっても、実証的研究を否定するわけではない。歴史的方法を用いる限り、資料批判(データの妥当性の検証)はやはり重要である。データ考証抜きにして歴史的研究の知見を語ることはできない。

社会学においても、この問題はデータの妥当性、信頼性として論じられてきた点であり、量的・質的方法にかかわらず重視されてきたところである。しかし、この方法論上の厳密さや解釈におけるストイックな態度が、他の方法やデータ研究への言及に対する慎重さを生み、理解を妨げてきたともいえるのである。誤解をおそれずにいうと、社会学の領域は、たとえばオーソドックスな

歴史学等の領域と比較して、用いるデータの質や種類について寛容で自由度が高い。文書記録に限らず、映像資料や口述記録も、社会学にとっては言うまでもなくデータである。データがこれだけ多様であるからこそ、説得的な資料批判は欠かせない。

ただ、家族社会学内部においては、アリエス、ショーターらへの資料解釈上の批判について、学界全体として積極的な議論が展開されたわけではなかったことは指摘しておかなければならない。訳出された主著を中心に各々のエッセンスをくみ取ることに主眼がおかれ、ラスレットによるショーター批判(イングランドにおける性革命)や、心性史研究相互の解釈の齟齬などについて敏感であったとはいえない。

‘本当に’近代以前に子ども期や夫婦愛がなかったのかという議論に拘泥することなく、方法論および認識論上のインパクトを受け入れたことは、結果的には生産的なことではあった。しかしながら、資料批判の厳密さは、学際的歴史研究領域において必ず問われる点である。家族社会学が他領域にも届く発信をしていくためには、概念の切れ味だけでなく、用いる資料の性格や限界について厳密に精査をするべきである。ただし、資料批判に厳格なあまり概念化や一般化に慎重になりすぎると、逆に社会学的研究の強み、意義が薄れるという結果になる。歴史的研究にかかわる際の社会的センスが問われるところである。

資料批判については不十分な点があったものの、フォーコー的な言説分析や歴史人口学の領域においては、それぞれ独自に資料収集や分析方法が確立され、方法の厳密さや解釈のストイックさは徹底した20年であったといえる。方法の精緻化がすすめば、すべての方法に通ずることはより困難になる。いずれにせよ(歴史研究に限らないが)100%‘客観的な’データは存在しないことを考えれば、データ解釈には量的/質的の2分法では線引きできない連続性と共通性があるはずである。特に歴史研究においてこの点を踏まえること

が、方法やデータを異にする知見を架橋する手がかりになるのではないか。

III. 家族研究から「家族」研究へ

次に、家族史研究がもった認識論上のインパクト、アリエス・ショック以降の近代家族論の展開についてレビューする。

1. 近代家族論：アンチテーゼからスタンダードへ

この 20 年は、落合（落合 1989, 1994, 2000）、山田昌弘（山田 1994, 2001, 2005）、上野千鶴子（上野 1994）、牟田（牟田 1991, 1996, 2006）らの近代家族論が登場し、定着した時期である。家族史研究は、家族社会学が前提としてきた家族モデルの歴史拘束性（＝近代性）を示し、われわれ近代人が抱く家族像を相対化する契機をもたらした。それまでの家族社会学が取り組んできた家族の普遍性、一般性について、その前提や政治性が問い直されたのである。

落合、山田、上野らの研究は、家族史研究の知見を、現代家族までをも分析可能とする「近代家族論」として展開、結実させた代表的な研究である。そして、この 20 年間は既存研究に対するアンチテーゼとして出発した近代家族論が、若い世代を中心に家族社会学のスタンダードになっていった時期でもある。

近代家族論を牽引してきた論者間では概念化に関する議論や内在的批判が積極的に提起された。落合と西川祐子との間で、近代家族の定義をめぐる論争が展開され（井上ほか編 1996）、山田は、機能主義と接合させる形で理論化した。近代家族に関する理論的研究は、個人化論や階層論、ジェンダー・セクシュアリティ研究と重奏するなかで、現実の家族変容を伴いながら進行した⁽⁶⁾。

牟田は、1991 年の論文において、近代家族の変化をとらえるためには、近代家族の特徴を並列に列挙するだけでなく、諸要素の布置連関を社会構造との関連においてとらえることが必要であるとする。そのことによって初めて変動を分析する

視点が得られるだろうと指摘する（牟田 1991）。より実証研究に根ざしながら、理論研究を深めていくのが牟田の特徴である。さらに、「ジェンダー家族」「家族のオルターナティブ」という概念から、近代家族とジェンダーの関連を認識することで、近代家族のはらむ政治性の深さを知ることができるとする（牟田 2006; 牟田編 2009）。

山田は、『近代家族のゆくえ』（1994）において自身の近代家族論を展開し、「自助原則」と「愛情原則」という二つの原則から近代家族の理論化を進めた。家族史研究から導出された近代家族概念を、感情労働やシステム論、機能主義の議論とクロスさせることで、概念の精緻化を進めている。歴史的研究に端を発する近代家族論を、社会と家族の関連や矛盾を記述、分析するための理論として高めた功績は大きい。さらに後続の著書においては、ギデンズ、ベックらの議論を踏まえながら、近代家族の先の姿を模索している（山田 2001, 2005）。戦後家族モデル解体後の家族モデルをどのように描くことができるのか、それはおそらく画一的な標準家族モデルではないはずであるが、未だわれわれはその具体的な姿を見定めていない。現実の社会システムや社会理論からこの問題を考えてきたフロンランナーである山田には、社会学内のみならず社会からの期待が寄せられている。

落合は、近代家族論の定着に評価を示しつつ、現実としての近代家族と、枠組みとしての近代家族論双方が「曲がり角」にあると指摘する（落合 2000）。落合は、「日本におけるこの 10 年の近代家族論の発展は、良い意味でも悪い意味でも、世界に類をみない独自の物であった」と評価し、交わされた議論も「世界に発信できるほどの理論的水準に達した」としながらも、「反面、他のアプローチへの目配り不足や近代家族万能主義というべき枠組の強引な適用がみられるようになったのは憂慮に値する」（落合 2000: 8-9）と、近代家族論がいわば家族社会学の主流になってしまったことが孕む問題を指摘し、近代家族論の整理、検討

を行っている。

落合(1985)が提唱した個人を分析単位として家族をとらえ直すというコンセンサスはすでに得られたと言ってよい。ナラティブアプローチやライフコース研究など隣接領域においても、個人を単位とする必要性は認識されていたが、これらと並んで近代家族論の貢献の一つとみることができる。方法論の上で分析単位を個人とすることは、データの制約をクリアすれば技術的な問題として対処することができる。しかしながら、近代家族論の示唆を真摯に受け止めるならば、われわれが近代家族(そして近代家族論)の枠組、イデオロギーから自由になることはそう容易ではないと言わざるを得ない。繰り返しになるが、家族史研究の認識論上のインパクトはわれわれが抱く‘家族’の歴史拘束性を明らかにし、われわれの‘家族’を相対化する必要を迫ったことだった。しかし、われわれは、今生きている社会(近代社会)の外側から社会を分析することはできない。家族研究者は、さまざまな局面で現状の家族に対する違和感や問題を認識しているとはいえ、一当事者として中流的、市民的、近代的価値観を内包して生きている。これからの家族を語る際に、そうした困難さ(「社会学の根本問題」)に無自覚なまま特権的な視点に立つことは避けなければならない⁽⁷⁾。こうした自戒や緊張感とともに、歴史研究や比較研究から差異や変化を見極めることが重要であろう。

2. 日本の家族研究と家族史研究の接点

「新しい社会史」の登場以前よりなされてきた日本における家研究、親族研究、村落研究と、アリエス以降の家族史研究の接点、関連性がここでの問題である。

日本における家族研究の蓄積と家族史研究との関連については、牟田の整理および問題提起(牟田1991, 1998)や落合の問題提起がある(落合2000)。

牟田は、「家族の社会史から家族社会学へ」と題した1991年の論文において、近代(的)家族が

二つのコノテーションを内包しているとして、両者を「規範的近代家族」と「社会史的近代家族」とに区別した。そしてその位相の違いをとらえ、前者の規範的前提を批判しつつ、社会史的家族研究を日本近代において展開する必要性を指摘している。さらに「10周年」セッションにおいては、家族史研究を経由して、制度論・変動論の意義をとらえ直す必要性を指摘している。それは、先述した70年代に森岡や上子によって表明された家族社会学の「自閉化」への懸念(構造的関心・歴史的関心が失われ家族を閉鎖的集団としてとらえがちであることを乗り越えるために重要であるとする。

落合は、「家」と近代家族の関連を問うことが、家族史研究の日本への適用や近代家族論の進展のために重要であるとし、両概念上の関係を「家」は近代家族である」という一元論に対して、「家」と近代家族を二元論的に別の概念としてたて、相互作用を論じる必要性を指摘する(落合2000)。

さらに、家族史研究およびフーコー、ドンズロらの視点を日本の国民国家形成期の家族研究に適用した牟田の研究を挙げることができる。牟田や小山の研究は(牟田1996; 小山1991, 1999)、従来の政治思想史や法制史における天皇制家族国家観や良妻賢母主義に関する議論に新しい知見をもたらした。

また人口学、ライフコース、言説分析など、従来の「家」研究とは異なるアプローチを適用することで、静態論的な「家」研究にかわる「家」や家族の動態論を展開した研究もある。

3. 現代家族研究への示唆

家族史研究には、現代家族研究に対していかなる示唆をもつのかという課題もある。この点については、田淵六郎が『社会学評論』⁽⁸⁾において次のような課題を指摘している。

「蓄積されている実証研究の量に比べると、知見の蓄積を通じて現代の家族についての我々の理解がどのように深まるのかについて

ての理論的考察は少ない。歴史的研究がどのような貢献を家族社会学に対して行っていくのかについては、理論的研究を含めて、様々な知見を体系化していく試みが待たれるといえるだろう。」(田淵 2006: 959)

徳川期や明治大正期の研究が現代家族を研究し、考えるうえでどのような示唆をもつのか、家族社会学者ならば説明しなければならない、しかしそれが十分ではないという指摘である。歴史学や社会経済史の領域ならば、このような指摘を受けることはおそくない。この問いに答えていく努力が家族社会学者には求められる。

歴史的研究が現代家族の研究に対してどのような貢献を行えるのかという総括的な検討は、残念ながらこの場ではできない。が、ここでは、貢献の可能性の一つの例として、森岡清美の『華族社会の「家」戦略』(森岡 2002)からの示唆を考えてみたい。この研究は、明治初期の華族の「家」の存続戦略を、制度に関する文書資料や、人口統計、日記伝記等の多種多様な資料から分析した研究である。現代家族の研究者にとって、この研究は時代や階層限定的な遠いテーマにみえるかもしれない。しかし本書は、家族社会学の第一人者が従来の「家」研究の手法に加えて、ライフコース、ライフサイクル、人口学など今日の分析道具をも駆使して歴史研究に迫ったものであり、現代家族を考えるうえでも多くの示唆に富む。「家」における女性の現実をとらえることは、概して資料的制約からみて容易ではないのであるが、本書は、多角的な資料分析を駆使して、華族の「家」における女性の現実に迫っている。

森岡は、大イエ、巨大イエ、小イエという概念を用いて、明治初期のイエの変容をとらえる。これらの概念は、一見古いパラダイムにのっとった過去の図式に見えるかもしれない。しかし、これらはイエが担っていた複合的な機能や内包されていた規範の重層性、相互の矛盾を描き出すための概念であり、小イエは直系制家族にあたると考え

れば、まさに日本の家族史研究が課題としてきた、「家」と近代家族の問題と射程を同じくするものである。

紙幅の都合上、詳しい内容を逐一紹介できないのが残念であるが、妻を取り上げた第 3 部では、家族において性と生殖の排他性が確立してくる過程にあって、再生産装置としての小イエ(直系家族)がはらんだ矛盾と、その解消手段としての妻の存在が示される。性と生殖、愛情が家族において不可分に結びつけられるのが近代家族イデオロギーであるが、そのことと、跡継ぎを確実に必要とする「家」の存続戦略は矛盾をきたす。妻は近代家族と「家」の矛盾緩和装置であり、華族の家父長制的「家」の存続戦略は、そうした妻や妾の「犠牲」を伴うものであった。一夫一婦制規範は常に外部を伴い、周辺にある人びとを差異化してきた。戦前にあっては妻や庶子、戦後においては「非嫡出子」として周辺的な位置づけをしてきた。森岡の研究は、たとえばフーコーやアリエスとは用いる表現や概念が異なるけれども、家族において女性の身体や心性に働く「政治」をとらえているという意味では、問題の射程は重なっている。そしてこれは、決して明治初期の華族に限定される問題ではなく、社会的政治的文脈は異にしても戦後へと連なる近代家族の問題でもある。森岡の研究には、家族史研究と「家」研究をつなぐ可能性と示唆が凝縮されているといえよう。

われわれは社会学的想像力や概念装置を動員することで、一見隔たったところにあるように見える研究から示唆を得ることができるし、その努力は、家族史研究にも現代家族研究にも実りある成果をもたらしてくれるに違いない。

4. 対話の可能性の探求

さて、ここまで見てきたさまざまな接合の試みは、問題意識として共有され一定の成果は収めたものの、従来までの家族論と近代家族論、家族史研究と現代家族研究には依然距離があるといわざるをえない。その理由を以下に探る。

まず用いているフレーム、パラダイムの違いが

ある。従来の研究が前提としてきた実証主義的家族研究は、近代家族論にとって批判対象であった。家族の近代化、民主化を模索するための近代主義的発想や戦後間もない時期の研究者たちの情熱を、今日同じ温度で共有することは容易ではない。ジェンダーに関する意識の差も両者を隔たらしめている一因である。

しかし、家族史・社会史研究の重要な目的の一つが、従来の歴史研究に対するとらえ直しであるとするならば、とらえ直した知見と従来の知見との接合は重要で、刺激的な作業である。牟田や小山らの国民国家形成期の家族研究は、そうした「とらえ直し」によって、従来の見解に、より新しく重層的な解釈をもたらしたといえる。

近代家族的研究と従来の家族研究の断絶には、問題意識を共有できないという問題もありうるだろう。たとえば、農村家族や一地域のモノグラフ的研究は、‘近代的’市民階層の家族とは異なっているという発想である。しかし、ここには、テーマの自閉化の問題が潜んでいる可能性がある。方法や領域に厳密であろうとするあまり、小さな発見に閉じていないか、全体社会や時代性といった社会的文脈との関連を問うことを避けてはいないか、という問題である。自身の研究テーマがもつ社会への示唆やつながりへの想像力は、社会学的研究として欠くべきではなく、その点に自覚的になるならばこの断絶は超えることが可能なのではないか。

分析や解釈において厳密であることは重要である。しかし、そこにのみ固執したならば、個々の研究がばらばらに乱立するだけである。求められる社会学的考察とは、こうした知見をつなぐ概念を研究することである。ポスト実証主義的研究は、統合的、網羅的なグランドセオリー志向から中範囲、あるいは個別の小さな物語を重視する方向に移行している。その流れにあって、社会学的知見をどのように提示するかは容易ではない。

とりわけ歴史的方法に顕在化する問題点として付け加えるとすれば、データの制約である。長期

的变化や地域差をとらえるべきという問題関心があったとしても、その分析に耐えうるデータがなければ研究は進展しない。現代家族の研究のように、新たに調査することも困難である。異質なデータや方法に対して一步を踏み出すには、方法やデータを第一義に考えるのではなく、あくまでテーマや問題関心に沿って (theme-oriented)、データに向き合う姿勢が必要であろう⁽⁹⁾。

IV. 「家族社会学」的家族史研究の課題：社会学に求められるもの

家族史研究は、出発点から国際比較や学際性を射程に含む領域であった。では、そのなかにおいて家族社会学的な研究の意義はどこに求められるだろうか。家族史研究者の一人として自戒を込めつつ課題を確認してまとめに代えたい。

1. これからの家族への視座

この点は、新しい歴史学それ自体が課題として提起した点とも重なる。現在、そしてこれからの家族への示唆をもつことが、社会学的研究には特に求められている。たとえば、中世のある地域家族の研究をするならば、概して家族社会学者より中世史家の方が史料収集能力や読解能力において秀でているだろう。もちろん、家族史研究に取り組む者として、歴史家に追いつくための努力は惜しむべきではない。しかし、知見が現代家族にどのような示唆をもつのかを語る概念や枠組は社会学者のほうがもち合わせているはずであり、そう期待されているということである。過去の家族をふまえて現代と将来を見据えることが一つの使命である⁽¹⁰⁾。

2. 学説研究・理論研究の重要性

社会学の分析道具を使いこなし提示するために必要なことは、理論研究や学説研究をより深めることである。その際に、概念枠組がもっている前提に対する反省的態度もあわせて求められる。家族社会学が実証研究を蓄積してきたことは評価すべきことであるが、対して20年間の掲載論文の

なかに学説研究が少ないことは残念である。

過去の社会学研究ならば、求められていたのはさまざまな個別の事象を統合して説明する一般理論であったと言えようが、現在は標準家族のみを前提としてマイノリティや‘周辺’事例を射程に含まないような一般化はとても受け入れられない。概念や理論の規範的前提にも敏感でなくてはならない。理論研究のハードルは高いが、同時にその重要性も高まっている。

3. 異なる方法間の架橋は可能か

本来の研究の遂行の順序では、問題関心が先にあって、方法やデータはその次に来るもののはずである。方法はあくまで手段でしかなく、もっとも重要なのはテーマであり問題関心であるというのが正論である。しかし現実には、テーマが用いる方法やデータに左右されることはやむをえないことであるし、先にデータや方法ありきの研究も実は少なくないだろう。それでもよいのだ、だから異なる方法間の架橋は必要ないという考え方もあるかもしれない。テーマにはこだわらず、ナイフを研いで切れ味を試すことも重要な研究活動の一つではある。しかし、高度化・精緻化した方法によって明らかになる一研究の知見は、かなり限定的なものである。自らの問題関心に忠実になるならば、他の切り口、他の道具によって明らかになる知見に無関心ではいられないのではないか。

問題関心自体がすでに拡散している、あるいは細分化されているということもあるかもしれない。しかし、(日本社会学会や関東社会学会ではなく)家族社会学会というテーマ・オリエンテッドな場集まっているのであるならば、家族的な関係性、家族にかかわる現象を対象としているという接点はある。最終的には、家族に関して解き明かしたい根源的な問題が共有できるかどうか、そのことに個々の研究者が自覚的であるかどうか方法論の違いを超えて対話を可能にする鍵となるだろう。

【注】

- (1) (平井 2003, 2005), (石黒 2007), (牟田 1991, 1998), (野田 2006, 2008), (落合 1995, 1998, 2004), (嶋崎 1990), (米村 2002)。
- (2) 研究動向(嶋崎 1990)のほかに書評や文献紹介としては比較家族のシリーズが取り上げられている(比較家族史学会編 2002; 比較家族史学会監修 1994, 2001, 2002 他)。歴史人口学や歴史学、民俗学に関しては、(宮良・森編 2000), (木下 2002), (宮川 2000), (井ヶ田 2002), (姫岡 2004), (清水 2004) など。
- (3) 吉川弘文館より佐々木潤之介ほかを編者として 2002 年より刊行されており、全 14 巻からなる。収録されている社会学的論文は以下。(布施 1982), (千本 1990), (石原 1981), (千田 1999), (上野 1994), (瀬地山 1990), (落合 1997), (嘉本 1997), (米村 1991)。
- (4) 日本でも翻訳され、書評等で取り上げられている代表的な研究としては、人口動態研究はラスレットら(Laslett 1965=1986)に代表されるケンブリッジ・グループの研究、感情研究は、アリエス、ストーン、ショーターら(Ariès 1960=1980; Stone 1977=1991; Shorter 1975=1987), 世帯経済研究の代表的なものとしては、ミッテラウアーらの研究(Mitterauer 1990=1994, 1977=1993)が挙げられている。
- (5) 10 周年記念特集号(「特集 家族社会学の回顧と展望——1970 年以降」(『家族社会学研究』10(1)号, 1998 年刊行)所収。
- (6) 日本の近代家族論の展開に関しては、学会後に新しい研究も刊行された(千田 2011)。
- (7) 牟田も、この点について以下のように危惧を表明する。
「われわれ家族社会学者は、「家族」を研究対象として、「家族」をいわば特権的な地位におくことになるわけだが、こうした家族神話(筆者注:「十全で健康な家族」のイデオロギー、そうした家族があるはずであり、それ以外が病理をうみだすという強力で無責任な「家族神話」)に手を貸しかねないことに自覚的・抑制的であらねばならないのではないか。」(牟田 1998: 121)
- (8) 『社会学評論』56(4)号(2006 年刊)の「分野別研究動向(家族)」で、対象年は、2001 年から 2003 年である。
- (9) 対話を困難にしている背景にはもっと単純な理由もあるかもしれない。思いつくままに挙げて

みると、自分の方法のみが正しく優れている、他の研究は認めたくない(「神々の闘争」)、専門的すぎてわからない(理解困難)、少し離れたテーマに興味を持てない(無関心)、自分の研究には必要ない(不必要)、あるいはそこまで手が回らない(多忙)などの理由である。そういった態度や雰囲気が学会を覆っているとすれば由々しき事態であるが、そのようなことはなくて、対話困難性には「正当な」理由や背景があり、しかも社会学的想像力や社会学的感覚を研ぎ澄ますことをもって乗り越え可能であると信じていたい。

- (10) 現在の家族研究が、「集団としての家族」のリアリティをどのようにとらえることができるのか(盛山2005)、あるいは正岡寛司がセッション終了後に口頭で提起した「家族の存在論」について考えていく必要があるのではないか。

【文 献】

- 赤川学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』 勁草書房。
- Anderson, Michael, 1980, *Approach to the History of the Western Modern Family 1500-1914*, Macmillan Press. = 1988, 北本正章訳, 『家族の構造・機能・感情』 海鳴社。
- Ariès, Philippe, 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Seuil. = 1980, 杉山光信ほか訳, 『子供の誕生』 みすず書房。
- Fauve-Chamoux, Antoinette and Emiko Ochiai eds., 2009, *The Stem Family in Eurasian Perspective*, Peter Lang.
- 千本暁子, 1990, 「日本における性別役割分業の形成」 荻野美穂ほか『性・産・家族の比較社会史 制度としての〈女〉』 平凡社, 187-228→2003, 永原和子編, 『日本家族史論集 11 家業と役割』 吉川弘文館, 316-356。
- 布施晶子, 1982, 「戦後日本社会の発展と家族の変容」 『日本社会の社会学的分析』 アカデミア出版会→2002, 片倉比佐子編, 『日本家族史論集 6 家族観の変遷』 吉川弘文館, 320-338。
- 速水融編, 2002a, 『近代移行期の人口と歴史』 ミネルヴァ書房。
- , 2002b, 『近代移行期の家族と歴史』 ミネルヴァ書房。
- , 2003, 『歴史人口学と家族史』 藤原書店。
- 速水融・鬼頭宏・友部謙一編, 2001, 『歴史人口学のフロンティア』 東洋経済新報社。
- 比較家族史学会編, 2002, 『家族——世紀を超えて』 日本経済評論社。
- 比較家族史学会監修, 1994, 『縁組と女性——家と家のはざままで』 早稲田大学出版部。
- , 2001, 『介護と家族』 早稲田大学出版部。
- , 2002, 『恋愛と性愛』 早稲田大学出版部。
- 平井晶子, 2003, 「近世農村における世帯の永続性——歴史人口学的分析」 『家族社会学研究』 15(1): 7-16。
- , 2005, 「研究動向 北欧の家族史——直系家族をめぐる」 『家族社会学研究』 17(1): 44-49。
- , 2008, 『日本の家族とライフコース——「家」生成の歴史社会学』 ミネルヴァ書房。
- 姫岡とし子, 2004, 『ジェンダー化する社会——労働とアイデンティティの日独比較史』 岩波書店。
- 井ヶ田良治, 2002, 『日本法社会史を拓く』 部落問題研究所。
- 井上俊・伊藤公雄編, 2010, 『近代家族とジェンダー』 世界思想社。
- 井上俊・上野千鶴子ほか編, 1996, 『岩波講座現代社会学 19〈家族〉の社会学』 岩波書店。
- 石黒史郎, 2007, 「戸田貞三の初期著作に見出される家族: 社会改良, 統計法と近代文明社会における家族」 『家族社会学研究』 19(1): 30-41。
- 石原邦雄, 1981, 「戦後日本の家族意識——その動向と研究上の問題点」 『家族史研究』 4, 大月書店→2002 佐々木潤之介編 『日本家族史論集 1 家族史の方法』 吉川弘文館, 252-275。
- 嘉本伊都子, 1997, 「『国際結婚』の歴史社会学的類型」 『社会学評論』 48(1)→2003 大日方純夫編 『日本家族史論集 13 民族・戦争と家族』 吉川弘文館, 120-151。
- , 2001, 『国際結婚の誕生』 新曜社。
- 木下太志, 2002, 『近代化以前の日本の人口と家族——失われた世界からの手紙』 ミネルヴァ書房。
- 小山静子, 1991, 『良妻賢母という規範』 勁草書房。
- , 1999, 『家庭の生成と女性の国民化』 勁草書房。
- 小山隆・家族問題研究会編, 1988, 『山間聚落の大家族』 川島書店。
- Laslett, Peter, 1965, *The World We Have Lost*, New York: Charles Scribner's Sons. = 1986, 川北稔ほか訳, 『われら失った世界』 三嶺書房。
- Mitterauer, M. and R. Sieder, 1977, *Vom Patriarchat zur Partnerschaft: zum Strukturwandel der Familie*, München: Beck. = 1993, 若尾祐二・若尾典子訳, 『ヨーロッパ家族社会史』 名古屋大学出版会。

- Mitterauer, M., 1990, *Historisch-anthropologische Familienforschung: Fragestellungen und Zugangsweisen*, Wien: Böhlau. = 1994, 若尾祐二ほか訳, 『歴史人類学の家族研究』新曜社.
- 宮川満, 2000, 『家・家族の歴史と婚姻習俗』第一書房.
- 宮良高広・森謙二編, 2000, 『歴史と民俗における結婚と家族』第一書房.
- 森本一彦, 2006, 『先祖祭祀と家の確立——「半檀家」から一家一寺へ』ミネルヴァ書房.
- 森岡清美, 2002, 『華族社会の「家」戦略』吉川弘文館.
- , 2005, 『増補版 真宗教団における家の構造』御茶の水書房.
- 森田登代子, 2001, 『近世商家の儀礼と贈答——京都岡田家の不祝儀・祝儀文書の検討』岩田書院.
- 牟田和恵, 1991, 「家族の社会史から家族社会学へ」『家族社会学研究』3: 50-60.
- , 1996, 『戦略としての家族』新曜社.
- , 1998, 「家族制度・変動論の家族社会学における意味と意義」『家族社会学研究』10(1): 111-138.
- , 2006, 『ジェンダー家族を超えて——近現代の生/性の政治とフェミニズム』新曜社.
- 牟田和恵編, 2009, 『家族を超える社会学 新たな生の基盤を求めて』新曜社.
- 二宮宏之, 1986, 『全体を見る眼と歴史家たち』木鐸社.
- 永野由紀子, 2005, 『現代農村における「家」と女性——庄内地方に見る歴史の連続と断絶——』刀水書房.
- 西川祐子, 2000, 『近代国家と家族モデル』吉川弘文館.
- 野田潤, 2006, 『「夫婦の不仲は親子の不仲か」——近代家族の情緒的関係についての語りの変容』『家族社会学研究』18(1): 17-26.
- , 2008, 『「子どものため」という語りから見た家族の個人化の検討——離婚相談の分析を通じて(1914-2007)」』『家族社会学研究』20(2): 48-59.
- 落合恵美子, 1985, 「〈近代家族〉の誕生と終焉——歴史社会学の眼」『現代思想』13-6, 青土社.
- , 1989, 『近代家族とフェミニズム』勁草書房.
- , 1994, 『21 世紀家族へ』有斐閣.
- , 1995, 「研究動向 歴史人口学と家族史研究」『家族社会学研究』7: 105-108.
- , 1997, 『新版 21 世紀家族へ』有斐閣→「核家族化の真相」「家族の戦後体制」322-351.→2002, 永原和子編, 『日本家族史論集 5 家族の諸相』吉川弘文館.
- , 1998, 「コメント 2 新しいパラダイムの課題」『家族社会学研究』10(1): 145-150.
- , 2000, 『近代家族の曲がり角』角川書店.
- , 2004, 「歴史的に見た日本の結婚——原型か異文化か」『家族社会学研究』15(2): 39-51.
- , 2005, 「視点 歴史社会学の分裂——実証主義と構築主義」『ソシオロジ』153 号: 137-138.
- 落合恵美子 vs. 山手茂, 1994, 「誌上討論 落合恵美子著『近代家族とフェミニズム』をめぐって」『家族社会学研究』4: 103-7.
- 落合恵美子編, 2006, 『徳川日本のライフコース——歴史人口学との対話』ミネルヴァ書房.
- 岡田あおい, 2006, 『近世村落社会の家と世帯継承——家族類型の変動と回帰』知泉書館.
- 齊藤修(中里英樹訳), 2003, 「歴史人口学の展開」速水融編, 『歴史人口学と家族史』藤原書店, 53-79.
- 瀬地山角, 1990, 「家父長制をめぐって」江原由美子編『フェミニズム論争——1970 年代から 90 年代へ』勁草書房→2002, 佐々木潤之介編『日本家族史論集 1 家族史の方法』吉川弘文館, 178-219.
- , 1996, 『東アジアの家父長制』勁草書房.
- 盛山和夫, 2005, 「データを分析することの意味」『家族社会学研究』17(1): 10-14.
- 千田有紀, 1999, 「『家』のメタ社会学 家族社会学における『日本近代』の構築」『思想』898→2002, 佐々木潤之介編, 『日本家族史論集 1 家族史の方法』吉川弘文館, 276-383.
- , 2011, 『日本型近代家族』勁草書房.
- 嶋崎尚子, 1990, 「研究動向『比較家族史学』の可能性」『家族社会学研究』2: 100-104.
- 清水美知子, 2004, 『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社.
- Shorter, Edward, 1975, *The Making of the Modern Family*, New York: Basic Books. = 1987, 田中俊宏ほか訳, 『近代家族の形成』昭和堂.
- Stone, Lawrence, 1977, *The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800*, New York: Harper and Row Publishers. = 1991, 北本正章訳, 『家族・性・結婚の社会史』勁草書房.
- 田淵六郎, 2006, 「分野別研究動向(家族)」『社会学評論』56(4): 950-963.
- 田間泰子, 2006, 『「近代家族」とボディ・ポリティクス』世界思想社.
- 上野千鶴子, 1994, 『近代家族の成立と終焉』岩波書店. →「ファミリー・アイデンティティのゆくえ」, 2002, 佐々木潤之介編, 『日本家族史論集 1 家族史の方法』吉川弘文館, 319-352.
- 山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ』新曜社.
- , 2001, 『家族というリスク』勁草書房.
- , 2005, 『迷走する家族——戦後家族モデルの

- 形成と解体』有斐閣.
- 米村千代, 1991, 『『家』と家憲——明治期における家規範と国家規範』『社会科学ジャーナル』30(1)→2002, 片倉比佐子編, 『日本家族史論集6 家族観の変遷』吉川弘文館, 203-223.
- , 1999, 『「家」の存続戦略——歴史社会学的考察』勁草書房.
- , 2002, 「研究動向 オーストリアの市民家族史研究——19世紀後半から20世紀前半を対象として」『家族社会学研究』14(1): 11-17.